

先 駆 者 紹 介 (001)

福音誌 1981 年 8 月号掲載記事の推敲

1883 年 (明治 16 年) にスミス夫妻 (George T. Smith) とガースト夫妻 (Charles Elias Garst) が、ストーン・キャンベル運動関連教会から来日した最初の宣教師でした。なお、宣教師ガーストは、日本ではそののち、「ガルスト」として知られていますので、私も「ガルスト」と呼ぶことに致します。

さらに、ガルストに関する文献として、「御門の国の陸軍士官学校卒業兵」とでも仮私訳できる *A West Pointer in the Land of the Mikado by Laura Delany Garst* が、ニューヨーク、シカゴ、トロント、ロンドン、そしてエジンバラに出版事務局がある有名な Fleming H. Revell 社から発行されています。発行年月は不記載です。

なお、「御門」とは、「ミカド」と読み、当時の日本人が、天皇のことをそのように呼んでいたのです。当時の日本人は、「天皇陛下」と呼ぶか、「御門」と呼ばなければ不敬罪に問われるような世の中でした。

ウエスト・ポイントというのは、ニューヨーク州南東部ウエスト・ポイントにある米国陸軍士官学校のことを意味します。

幸いなことに、ガルスト夫人がお書きになったこの本は、2003 年に到り聖学院大学出版会から『チャールズ・E・ガルスト』と題して翻訳・出版されています。その分、ガルストに関しまして、私は深入りをしないことに致します。

そのほかにもガルストは、基督者としての社会正義感が強い稀な宣教師で、金持ちが税金を払い、貧しい者は免税されるべきだとの主張を掲げたことでも有名です。このことでは明治学院の工藤英一教授がよく研究をなさり、「単税太郎ガルスト」の主題で講演などをされていました。同名の著書をも発表されています。

すでに述べましたように、ガーストではなく「ガルスト」と呼ぶことに、私個人としては相当に抵抗がありますが、ディサイプルの間では「ガルスト」という呼称が定着してしまっていますので、私も「ガルスト」と呼ぶことに致します。

このガルストは、1853 年 (嘉永 6 年) にオハイオ州でドイツ系移民の末裔の一人として生まれた人物です。しかし、長老教会員として成長しています。

ドイツ系移民のほとんどの人たちは、「人種のるつぼ」であった新世界に到着直後から、少なくとも宗教的には、自ら「るつぼ」の中に入って溶かされ同化していったと理解して

よいと、私はそのように理解しています。これも余談ですが、ガルストが生まれた嘉永6年といえますと、ペリーが浦賀に来航した年のことです。

こん日では、ガルスト家はアイオワ州を中心とする大規模な穀物生産者として成功しています。

半世紀以上も前に、ケンタッキーの小さな学校で私をストーン・キャンベル運動の教会史や基督者の一致運動に導いて下さった恩師ハウツ La Vern Houtz (敬称略)によりますと、ハウツ家とガルスト家は姻戚関係にあります。家系図を頂きました。

そのようなこともあって、初めから私はガルストに関して強い関心を抱いていましたし、今はすでに帰天なさったガルスト家のお孫さんの一人と文通もしていました。

ウエスト・ポイント陸軍士官学校に入学したチャールズ・E・ガルストは、その後にグラント将軍 Ulysses Simpson Grant (1822~1885) に任命されて西部開拓僻地で先住民たちと戦うために派遣されています。

グラント将軍は、南北戦争勃発時には北軍の総司令官でした。米国の50ドル紙幣に将軍の肖像画が印刷されています。そして何よりも、ストーン・キャンベル運動が生んだキリストの教会のディサイプルス派の中心的な存在でもありました。

ウエスト・ポイント在学中にアレキサンダー・キャンベルの書いたものを熟読していたようです。

仲々に乱暴なガルスト大尉殿は、当時としてはやや晩婚、28歳で結婚しています。一説によりますと、アフリカに宣教師として行きたかったともありますが、在任官中に東洋の神秘の国である「御門の国」に強い関心と憧れを抱いていたようです。

当時の日本は、東洋の神秘的な国として、多くのアメリカ人の好奇心を掻き立てていた節があったように読んだことがあります。ガルスト大尉殿は日本の風俗習慣や宗教などを熱心に研究していたようです。

G.T.スミス宣教師は1843年(天保14年)にオハイオ州で生まれています。ガルストより10歳年下ということになります。南北戦争に北軍兵士として従軍して負傷し、捕虜になっています。アレキサンダー・キャンベルが設立したウエスト・ヴァージニア州最西端に位置するベサニー・カレッジに学び、カナダ生まれの娘さんと結婚して、宣教師として日本に派遣されたのです。1849~1920年説もあります。

本国に帰国後、婦人を牧師として任命することの是非をめぐる大きな論争が起ったと

き、スミスは宣教師としての経験から賛成意見を代表しています。

オハイオ州は、一応は北部に属している州です。ベサニー・カレッジのすぐ西側に位置しています。南端はオハイオ川に面し、川向こうはケンタッキー州です。

トーマス・キャンベルと息子アレキサンダー・キャンベルたちが中心になって活躍したマホーニング・アソシエーションもありましたし、ケンタッキーからはストーン運動の影響も浸透していた地域です。

そのためにストーン・キャンベル運動（聖書復帰運動・基督者一致運動）が盛んであった開拓者農民たちの新しい州です。ストーン・キャンベル運動を構成していた人々の中には、当然のことですが、保守的信仰理解の人もいれば、進歩的聖書理解の人もいたわけです。また、その中間的な立場の人もいたわけです。

こん日では、保守的な人々は無楽器グループ＝チャーチズ・オヴ・クライスト教群を形成していますし、進歩的な人々はディサイプルスという群れを形成しています。そしてその中間にクリスチャン・チャーチズがあります。オハイオ州には現在でもそれら三つの教群が混在しています。ストーン・キャンベル運動の強い地帯です。

ガルスト夫妻とスミス夫妻は、ストーン・キャンベル運動内のディサイプルス教群から日本へ派遣された最初の宣教師として、1883年9月27日土曜にサンフランシスコ港を出航し、10月19日（金曜日）に横浜港に到着しました。荒天候の3週間の船旅であったようです。

1883年、明治16年といえますと、大阪紡績会社が操業を開始した年で、日本の帝国主義が朝鮮の仁川を日本の租借地とする条約の締結を強行し、フランスがインドシナ半島の安南を保護国化し、さらに英国がエジプトを保護国としたきな臭い年でした。

横浜の居留地に滞在中の二組の宣教師夫婦は熱心に日本語を学び、バプテスト教会の宣教師の勧めもあって、秋田に向かいました。その当時、すでに太平洋側の東北地方にはバプテスト教会の宣教師が活動していましたので、日本海側での宣教活動を勧められたそうです。

そのことの背景には、外国人居留地から出て国内に移住するには、旅券が必要でした。そのために学校で英語を教えることが旅券を取得する最善の方法だったのです。

その当時の日本の人口 36,000,000 に対して宣教師数は 145 名であったようです。それらの宣教師の多くは、たとえば5年後に来日したスナッドグラス夫妻にしても、さらにそれ

から4年後に来日したアズビルが率いたマッケーレブ隊の5名、あるいは1801年（明治34年）10月1日チャイナ号で横浜到着したカニングハム夫妻も、居留地を中心に、日帰りで、周辺の都市で活動するというパターンであったようです。

国内移住許可を得るのは厄介なことであり、西洋人に必要な生活必需品や医療関係のことを考えますと、居留地周辺で宣教活動をするということも理解できます。

そのような状況の中で、当時はまだ僻地であった秋田に赴任すると決めたというのは、極めて勇気の要る信仰の決断であったと思います。築地居留地脇に聖路加病院が出来たということも、そのような背景と必要があったからだとは思いますが。

ガルストとスミスの秋田行きも、こん日のように、新幹線や飛行機で行けるという時代ではなく、津軽海峡を経由しての船旅でした。これ以上の詳細は述べません。あとはガルスト夫人の手による上記報告文をお読み願います。

2組の宣教師夫妻の祈りの結果、翌1884年には秋田地方で最初の日本人入信者2名を出し、こん日では日本基督教団に属している幾つかの教会が生まれています。学校設立を計画しました。そして学校で英語を教える...ということで国内旅券を得たのでした。

そののちに、スナッドグラスの提案もあり、結果的に滝野川聖学院が誕生することになります。ガルストは1898年に東京で帰天し、青山墓地内の外国人墓地に埋葬されました。同じ敷地内には、無楽器派教群の宣教師で、最初にこの日本から帰天された宣教師夫人であったアリス・ビショップも埋葬されています。

ガルストを含む、同じストーン・キャンベル運動内のディサイプルス教群の日本の教会史として、日本基督教団滝野川教会内の基督教会（ディサイプルス）史刊行会が発行した、秋山操編集による「基督教会（ディサイプルス）史」1973年9月24日出版をお勧めいたします。

なお、八幡山の拙宅に秋山操先生をお招きして月例伝道者会でお話を願ったこともありましたが、同先生の帰天なさるまで個人的に親しく教会史をお教え頂いたことを懐かしく思い出しています。御国での再会が楽しみです。